



TITLE:

社會階級の交替性

AUTHOR(S):

益田, 熊雄

CITATION:

益田, 熊雄. 社會階級の交替性. 經濟論叢 1930, 30(3): 550-554

ISSUE DATE:

1930-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129855>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第 卷十三第

行發日一月三年五和昭

論叢

資本利子税及第二地方附加税の禁止規定 法學博士 神戸 正雄

數學的經濟學 文學博士 米田庄太郎

國際價格の理論 文學博士 高田 保馬

講演

日本に於ける海上保險の起原發達 經濟學士 平生 釵三郎

雜錄

世界の食糧問題 經濟學士 八木芳之助

定期飛行機の職能 經濟學士 山口 信男

女給税に就て 經濟學士 羽根 盛一

國際移民統計 經濟學士 金持 一郎

社會階級の交替性 經濟學士 益田 熊雄

疾病統計瞥見 法學博士 財部 靜治

近着外國經濟雜誌主要論題

社會階級の交替性

益 田 熊 雄

一 前 言

最近の *Economic Journal* (vol. 39) に、Morris Ginsberg による所の生物學的觀察に基ける社會階級の交替性を暗示せる一論文がある。^{*} 社會階級に關する研究の盛なる今日、同問題に就いての斯る見解も亦興味深きを信じて、以下氏の所説を紹介して見やう。

「社會學及び政治學に於て社會階級なる觀念は重要な役割を演じたるに關らず、階級分化の性質及びその狀態に關する科學的研究は餘り存在しない。マルクス及びその後繼者が生産の形式に基き社會斷層の種々の形を述べんと試みたが、然し多少近代的状态に於ては適して居ない様である。斯くの如くに此の方面の研究の不振なる理由は、一に社會階級の分類の困難、その態様に關する觀察分析及び記錄の一般に承認せられ

たる方法が存在しない事實に基くものである。

私は本論文に於て社會階級間の移動の程度を秤る事によつて、此の大問題の一部分を即ち社會階梯の實在及び重要を取扱はんと努力したのである。

同職業の人々の團體は同事項に就いては意見が一致し易いものである事實を認むれば、職業によつて概括的には人の生活様式・教育程度従つてその社會階級が推論せられ得るからして、此の意味に於て職業の様式によつて表はされた團體を取る事にしたのである。即ち、

- 第一階級……自由職業者、雇主Ⅰ、自己計算者Ⅰ、
- 第二階級……雇主Ⅱ、自己計算者Ⅱ、俸給生活者、
- 第三階級……賃銀生活者、熟練工、半熟練工、不熟練工、
- 本論文の材料は次の三組より成る。
- A、照査に對する回答より得られたる材料
- B、リンカーン旅館の投宿人原簿
- C、五都市の社會狀態に就いての Bowley 教授の調査より得られたる材料

二 照 査

* Morris Ginsberg: Interchange between Social Classes.

此の材料は一九二七乃至八年に大學の教授及び學生、師範學校の教師、第二級官公吏及び他の俸給取官吏、及び賃銀生活者に就き蒐集せられたるものである。而して若し働いて居るならば彼等の父、父系祖父、母系祖父、兄弟姉妹に就いても同じく蒐集せられた。此くして蒐集せられたる人々の職業別、性別を示せば次の如くである。

職業	總數	女子
學生	五八〇	二五二
教師	八七二	五三七
自由職業者	一一三	二一
雇主 I	二	—
雇主 II	二九	—
自己計算者 II	三三	—
俸給生活者	七六五	八八
賃銀生活者	四五〇	二七
計	二・八四四	九三一

此くして此の材料より三代に亘る夫々の職業的相關々係の表を得て居るのであるが、之を總括して前述の三階級に大別し百分比を以てその階級的相關々係を

求めて居る。即ち、

第一表

		子		
		第一階級	第二階級	第三階級
父	第一階級	33.3	7.0	0.69
	第二階級	54.9	52.7	27.1
	第三階級	11.9	40.2	72.3

第二表

		父		
		第一階級	第二階級	第三階級
父系祖父	第一階級	55.6	6.0	1.3
	第二階級	38.9	71.9	36.2
	第三階級	5.5	22.1	62.5

第三表

		父		
		第一階級	第二階級	第三階級
母系祖父	第一階級	43.2	8.4	1.8
	第二階級	50.8	65.3	38.1
	第三階級	7.0	26.4	60.1

第四表

		父系祖父		
		第一階級	第二階級	第三階級
母系祖父	第一階級	48.6	8.2	1.4
	第二階級	46.7	65.2	37.7
	第三階級	4.7	26.6	60.9

第 五 表

		子		
		第一級	第二級	第三級
父系祖父	第一階級	25.1	7.0	1.6
	第二階級	57.7	57.7	35.5
	第三階級	17.2	35.2	62.9

第 六 表

		子		
		第一級	第二級	第三級
母系祖父	第一階級	22.7	7.4	0.80
	第二階級	57.6	55.9	36.5
	第三階級	19.8	37.0	62.7

表によれば第一階級の子の一二%が第三階級の親を持つて居り、前世代に於ては之に該當する數は六%である。若し一世代飛んで子と祖父とを比較するならば此の數は約一八%となる。但し此の表に於て子の中には自由職業者と云ふ階級の中に、將來何の職業に就くか不明な甚だ澤山の學生を含んで居る事は注意して置かねばならぬ。第二階級より第一階級への移動は自ら相當大である。亦祖父の時代に於ける階級間の雜婚の範圍に就いての幾何かの徴候は表四より得られる。第一階級に於て母系祖父の四%は賃銀生活者であり、自

由職業者が同階級に對する數は四八%、第二階級に對しては四六%であるに比して、第三階級に對しては僅は一・四%である事が知られるのである。

以上を概括すれば次の結論が暗示せられるであらう。即ち第三階級より第一階級への上昇的移動性が明かに存する。而して此の傾向は現世代に於ては過去の世代に於けるよりも大である様であると。

三 リンカーン旅館の投宿人

私は從來職業の存在する社會層が見られ得る報告を得んと努力して居たが、漸くリンカーン旅館の投宿人原簿により職業に就いての信頼し得べき材料を得る機會を得た。一八八六乃至一九二七年（一八九四——一九〇三、一九二一——一八は缺除）の間に投宿せる者の職業を表にして居るが、此の表に於ては異なる階級間の割合の變化が全體に於ては極めて少く、唯現在に於ては僧侶が多少減少して居る事と、勞働階級が匍入し始めたと云ふ徴候が存するのである。

四、ボーレー教授の材料

此の材料はボーレー教授が一九二四年になした*
市に於ける労働階級人口の社會的境遇に關するものである。

父	子	不熟練工 V	中 間 IV	熟練工 III	中 間 II	上級及中級	總 數
不熟練工 V 總數	270	18.1	24.0	53.7	4.0	0.19	520
中 間 IV	254	11.2	32.8	49.8	6.3	—	464
熟練工 III	673	8.3	16.8	64.7	10.0	0.25	1,225
中 間 II	49	5.3	5.3	51.3	38.2	—	76
上級及中級	2	—	—	83.3	—	16.7	6
總 計		1,248				總 計 2,291	

離 録
社會階級の交替性

此の表により暗示せられる多くの興味深き點の中に
て、特に二つに就いて述べて見やう。第一に労働階級
の第二階級に上りつ ある子供の人口が、不熟練工の
親よりの四%から熟練工の親よりの一〇%に變化して
居る事である。第一階級へ上る數は甚だ少いから無視
してよい。第二に不熟練工としては、彼等の子供の唯
一八%しかその階級に残らず、他は熟練工となる事實
よりして、不熟練工なる階級は固定したる階級ではな
いと云ふ事である。但し此の結論は、調査の時期に家
庭に住んで居た子供に就いてのみカードが蒐集せら
れ、そして多くの場合に分類が困難であつたと云ふ制
限を受ける事は注意を要するのである。」

五 結 言

此くの如くにして彼は結論に到達して居る。即ち
「現世代に於ては上昇的移動性が増大する様であり、
下降的移動性は極僅少であつて而も三世代を通じて殆
んど恒常的である様である。」と。

* Bolton, Northampton, Reading, Stanley, Warrington.

最後に筆を擱くに當つて、一言私をして批判せしむるならば、此の論文が從來行き詰りをなして居た所の社會階級の研究に、職業より之を分析する即ち研究の一新機軸を開拓した事は、彼の功績として認めたい。

然し彼が用ひた材料に於て、その材料の組成分子が現實社會の組成分子と果して類似して居るものであらうか、詳言すれば例へば可成り上昇的移動性多き學生を現實社會の夫に於けるよりも過多に採用し而も學生を凡て第一階級に包含せしめて居る結果 結論に於て上昇的移動性が現實社會の夫よりも大に表はれ來りし傾向は無いであらうか。私は此の點に疑を懷く結果、亦結論をも直ちには承認し得ざるものである。

(五・二・一〇)